今の活動に力いっぱい取り組み、人との関わりを楽しむ子

～作業学習をとおして～

植　田　秀　樹

はじめに

W男は、本校小学部より連絡入学してきた。身辺自立の面で十分には定着していないため、常に配慮を必要とする。しかし、中学部という新しい集団のなかにいることで、自分なりに中学生になったのだという自覚ができてきたようである。

初めてする活動に対しては抵抗を示し、なかなか積極的に取り組めない。また、周りの人に対する関心はあるのだが、自分から友だちを誘うような場面は見られない。このようなW男が作業学習をとおして、好きになった活動に積極的に取り組もうとし、自ら人と関わっていこうとしつつある姿を述べてみたい。

1　プロフィール

(1)　生育歴

・昭和58年５月20日生　13歳８か月　中学部１年　男子

・平成２年　本校小学部に入学　今年度より中学部に連絡入学

・両親、姉、妹、祖父母、本人の７人家族

　両親は教育熱心であるが、やや甘い面もある。

(2)　諸検査による実態

・知能検査　IQ40以下（言語性45以下　動作性45以下）WISC－R…平成８年７月実施

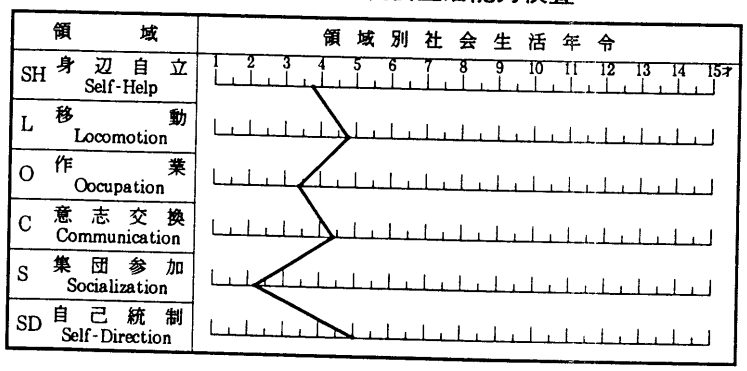
・Ｓ－M社会生活能力検査　SA3:8

　他の領域に比べ身辺自立・作業の領域が低く、集団参加の領域は著しく低い。

・自分づくりの段階

　自我の拡大・充実の段階にあると思われる。

表－16　Ｓ－M社会生活能力検査



(3)　楽しんでいる姿の特性

・歌を歌う、音楽を聞く、食事をするというように、気分が解放されリラックスできる活動を好んでしている。

・自転車には幼稚園の頃から乗れる。このように慣れた活動を好んでしている。

・買い物学習や校外学習など校外に出かける活動を楽しんでいる。

・特定の人の名前を何度も呼んで、期待する反応が返ってくることを繰り返して楽しんでいる。

2　取り組みの構想

(1)　指導仮説

以上の実態をもとに、W男がどのような活動にも積極的に楽しんで取り組めるような力をつけ、よりよい人間関係が築いていけるように、次のような仮説を設定した。

<めざす像>	今の活動に力いっぱい取り組み、人との関わりを楽しむ子
<つけたい力>	・基本的生活習慣の定着　・集中力 ・上半身の筋力および手指機能の向上　・人と関わる力
<題材と支援>	・ねこ車などの道具を繰り返し使用することで、活動に慣れさせる。 ・課題学習でのスクーターボードでは、決まった流れを毎日自分ですることで、自主性と上半身の筋力を高める。 ・日常生活での人との関わりは、担任外の教師への用件を頼んだり、他の生徒を呼んで来るように頼んだりすることで、人との関わりを必ず必要とする状況を設定する。

何度か経験のある活動に対しては自分から取り組めるが、新しい活動にはなかなか自分からは取り組もうとしない。そこで、多少拒んでも教師と一緒にゆっくりと時間をかけて取り組むことで、活動に慣れさせるようにしたい。また、同じことを繰り返すことによって、新しく取り組む活動に見通しが持て、活動の幅も拡げていけるのではないかと考えられる。

(2)　指導方針

①自分でできるようになるまでは、ゆっくりと時間をかけて指導し、自分でできるようになりだしてからは徐々に手を離して、自主的に活動する姿を賞賛する。

②これからする活動に見通しが持てるように、具体的なやり方や順序を教える。

③本人との約束や具体的なめあてを決めておき、守れているか本人と一緒に確かめ、賞賛したり励ましたりする。

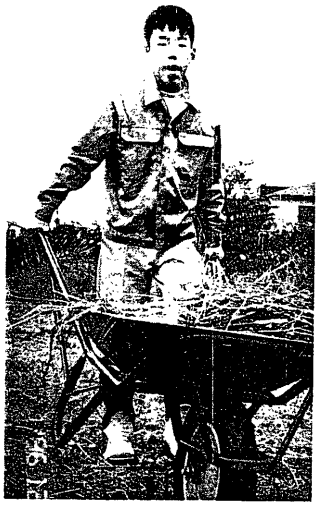
3　指導の実際

W男は、作業学習では農園班に属している。W男は植物の苗を植えたり、農作物を収穫したり、草を取ったり、スコップや鎌などの農具を使うというような経験には乏しい。初めてする活動が多く、それに対して積極的に取り組めないため、少しは作業をするがすぐに集中力が途切れてしまい、座り込んだり、ポケットに手を入れたまま壁にもたれかかって、作業をやめてしまったりする。

ねこ車で物を運ぶという機会もほとんどないため、ねこ車で草を運ぶように指示しても、初めは長続きはしなかった。そのため、教師が目を離さず一緒にするようにし、具体的なやり方や順序を教えて、繰り返しさせることによって、活動に慣れさせるようにした。や

がて、自分でねこ車を用意し、草を積み、所定の位置まで草を運んで捨て、ねこ車を水で洗って片付けるという一連の作業が身についた。また、他の生徒が運べないくらい、ねこ車にいっぱいのたまねぎを積んだ時も、W男はバランスよくねこ車を押していた。道具の扱い方や仕事の要領が分かって、作業がスムーズにできるようになった。

「誰かねこ車で草を運んでください」と言うと、必ず「僕がします」という元気のよい返事がW男から返ってくる。その時の表情は自信に満ち、やる気満々であり、ねこ車に関しては、楽しんで取り組んでいることが分かる。


ねこ車で草を運ぶW男

W男が農園作業をする際の人との関わりについて述べたい。1学期中は、教師とペアを組み、一緒にゆっくりと時間をかけて取り組むことによって、農園作業に慣れるように心がけた。また、教師と一緒ということで、W男にとっても、比較的集中力が続いたと思われる。2学期になってからは、今度は友だちとペアを組むことで、生徒同士で協力して作業に取り組めるように配慮した。その際、教師の意図や指示の伝わりやすいT男とペアを組ませ、T男から誘われることで、スムーズに作業に取り組めるようにした。しかし、取りかかりはよいが、途中で作業をやめて座り込むことが多かった。原因は、T男に対する甘えがあったことだと考えられる。

次に、「合同はし入れ」の作業学習について述べてみたい。この作業も当初は、手がすぐに止まったり、おしゃべりをしたりすることが多かった。しかし、時間をかけて繰り返していくうちに作業に慣れて、集中して取り組めるようになってきた。巧緻性にかけるため、はし袋がしわくちゃになってしまい商品にはならないのだが、袋に詰めたはしをビニール袋に入れ、テープでとめるという一連の流れを、友だちがしているのを見て真似ることができた。また、教室の後ろにはしを置いているのだが、1学期の中頃から、作業学習の時間以外であっても、「はし入れをします」と言って、自ら取り組んでいる場面が多く見られるようになった。

4　考察と今後の課題

「ねこ車」や「合同はし入れ」の実践例からも分かるように、W男は繰り返し慣れることによって、活動に見通しを持つことができる。それによって自信も持て、確実に作業をこなすことができるようにもなった。このように、繰り返してパターン化するなかで身についてきた部分が大きい。したがって、このような作業学習の取り組みや題材は、W男にとって、適切な学習であると思う。

今後は、日常生活の指導においても、繰り返し活動に慣れさせることによって、興味の対象を拡げ、積極的に活動を楽しみながら取り組み、人との関わりも拡げていきたい。さらには、主体的に物事や人に関わりながら成長するW男の姿を期待したいと思う。